



# 浜通り研修最終発表

上旬大熊組 D班

足立玖美佳 尾本晴奈 熊野琉里 佐藤翔太 西村玲奈 井上開人

# 目次

---

- ・大熊の紹介
- ・1日目、2日目
- ・3日目(原発見学)、4日目
- ・視察を経ての感想、意見
- ・5日目(交流)
- ・交流会を経ての感想、意見
- ・誰に伝えるか、伝えるときに大切にすること
- ・まとめ

# 大熊町について



居住数: 557人(令和5年7月1日時点)

東京電力第一発電所福島原発4号機が位置し、福島第一原発事故により町内全域に避難指示が出された。

2022年6月に帰宅困難区域のうち特定復興再生拠点区域の避難指示が解除され、町の中心部であった区域を取り戻した。

# 1, 2日目

---

・オリエンテーション

◎議論(事前知識や考えのみ)

・試料の採取、整理

## 3, 4日目

---

- ・中間貯蔵施設視察
  - ・1F視察
  - ・放射線法令に関する考察の講義
  - ・試料の採取、整理
- ◎議論(視察を経て)

## 視察を経ての感想、意見

---

- ・心の中で遠くの出来事だと思っていたが、バスで行けてしまう場所に帰宅困難区域があり、身近さに驚いた。
- ・原発を見て、頭では危険でないと理解していても恐怖を感じ、安全だと説明されても納得できない福島の人たちの気持ちが少し理解できた。
- ・日本にいる以上地震はいつか起こってしまう、またいつ起きるかは予測ができないため、事前の準備が大切だと感じた。

# 5日目



- ・採取試料の測定、計算
- ・大熊町交流会
- ◎議論(交流会を経て)

# 交流会を経ての感想と考え

## 感想

- ・大熊町に帰りたいと思う人とそうでない人とのギャップがあることに驚いた
- ・中間貯蔵施設ができるときの町の人々のリアルな心情と葛藤を聞くことができた
- ・復興の考え方が一概に「もどに戻す」では無く、今後の町の発展も考えられている事に感銘を受けた



## 考え

- ・直接見て、聞かないと分からないことがある

→メディアの情報だけでは分からないことがある。自分が考えていたり、知っているものとはまた違うことが分かってくる。

- ・自分たちにできること

→様々な立場からの当時の状況や復興を知ることで、将来考えられる災害時に役立つ情報を伝えていく。

# 誰に伝えるか

---

- ・同じ研修に参加したメンバー
  - ↳異なる意見を直接知ることが出来る 視野の拡大
- ・友人や家族といった今回の研修に参加していない近しい人
  - ↳信頼から得られる理解 伝えやすい手段である
- ・SNSや海外、偏見を持つ不特定多数の人への伝達
  - ↳伝達主はどのような存在なのか データの信頼性はどの程度か(誤解の発生)
- ・勉学に長けた人(出身校の教授等)や報道陣、影響力のある人
  - ↳情報を広める力と説得力

# 伝えるときに大切にすること

---

- ・現地の様子は行った本人から伝える。
- ・写真や動画を用いて伝わりやすいように工夫する。
- ・事実をしっかり伝え、専門的な知識がない相手にも伝わるように話す。
- ・知識やデータも大切だが、主観で感じたことを伝えることも大切。
- ・「事実」と「感情」を分けて伝える。
- ・実際に見た上で「賢く」怖がる。
- ・相手の持っている考えを否定しない。
- ・相手の感想や専門的な意見も聞いてみる。

## まとめ①



- ・自分の目で見ることの大切さ

  - ↳放射能度を実際の計測する事や福島を実際に歩いてみる事など、感じてみる事

- ・意外と知らないことの多さ。

- ・「正しさ」を考える。

  - ↳正しい知識だけを持つだけでは、足りない。。

科学的根拠があっても、そこに住む人からすると、「正しい情報＝安心である事」とは限らない。

## まとめ②

---

- ・原発に対する見方の変化

↳こわいもの？ 処理水がどういうものであるのか？

「放射線＝危ないもの」？

もともとそこに住んでいた人の声の方が、重要ではないか？

- ・同じ大熊町の中でも、いろんな復興に向けて、様々な取り組みがある。

役場、学校、JAEAなど